

好善社資料を中心とした国内ハンセン病療養所内 キリスト教会と長島聖書学舎⁽¹⁾についての一考察

阿部伊作

はじめに

2021 年は、ハンセン病問題において、「らい予防法」廃止 25 年「ハンセン病国賠訴訟」勝訴 20 年目の節目の年であった。国内ハンセン病療養所は、ますます高齢化の時を迎え、入所者・証言者が少なくなって来ている。人権回復の課題など、記憶の風化をどのようにするか、その記録の収集・保存や継承の重要性が社会で指摘されている。筆者は、アーキビストとして科研費奨励研究採択⁽²⁾を受け、療養所内教会資料の保存と活用等についてアンケートまたフィールド調査を計画したが、新型コロナウイルス感染拡大で、各療養所へ入ることができず、療養所内教会と療養所内保存機関への調査、現物確認、散逸の保護、回復者への聴き取りなどは、別の発表とすることとし、本稿では、現物・教会堂などの保存や活用において、何に目を留め、次の世代に何を継承すべきかなどの質的な事柄について触れることとする。特にハンセン病療養所（以下療養所）内キリスト教会と支援団体好善社に焦点をおき、それらの関わりから本質的な問いかけを明らかにするものである。全体は 6 章で構成される。第 1 章で先行研究を整

(1) 本稿では、資料引用などでの病名の表記はそれぞれの時代で使用された「癩」「らい病」などとし、患者の場合は文脈により「回復者」「患者」「ハンセン病患者」等の用語で表記した。

(2) 朝日新聞夕刊「ハンセン病人権侵害の教訓風化させない」2021 年 9 月 9 日東京 4 版、1 面

(3) 本研究は JSPS 科研費 JP20H00687 の助成を受けた研究の一部を基にしている。

理し、第2章で国内療養所とは何か、歴史的経緯と社会的背景について、3章で療養所内教会について、4章で支援団体好善社について、5章で療養所内キリスト者の活動について、6章で療養所内外の人々の交流とその意義について述べ、最後にまとめを記す。

この研究のきっかけは、日本キリスト教史関係図書にハンセン病療養所教会の記述が少ないこと、日本の神学校史の図書に「長島聖書学舎」というハンセン病療養所内に存在した聖書を学ぶ学舎があった事実についての言及がないことによる。ハンセン病回復キリスト者が不在となったらこの歴史の事実はどのように残るか（多くの回復者は旧優生保護法下で子どもを残すことが出来なかった）。回復者の本は刊行され、ハンセン病救癒の記録はなされても、回復者キリスト者自身の尊厳をもって生きたその信仰の意味、それに対しキリスト教会の正負の歴史が十分に評価され認識されているか、周辺的な事柄になる危惧があり研究を思い立った。調べる中で、筆者の所属大学の前身校の偕成女子神学校校長であったピアソン女史は、4章で記す好善社の創立者と関わりがあることがわかり身近に覚えた。横浜共立学園では戦後、療養所慰問など長く関わりを持っている⁽⁴⁾。

瀬戸内3療養所では、ハンセン病療養所内に存在する建造物群等をユネスコ世界文化遺産として登録する運動を推進している。そこでは、負の遺産を通して、人類の抱える様々な偏見・差別の解消に寄与することが目的に掲げられている⁽⁵⁾。

この研究は、アーカイブズ学からの研究であるが、本紀要の主旨、また教会に関わる資料を扱うため、キリスト教的文脈からのアプローチを行う。コロナウイルス発生以後の世界を覆う制限ある生活で、感染病が世界

(4) 救済献金『横浜共立学園 120 年の歩み』1991 年、343 頁、青山静子『近代日本 (1868-1941) におけるハンセン病対策と 3 人の来日女性宣教師のハンセン病患者救済活動』金城学院大学大学院博士論文、2014 年、125 頁

(5) ハンセン病療養所世界遺産登録推進協議会 2020 年次報告書 2 頁、井出明『悲劇の世界遺産—ダークツーリズムから見た世界』文春新書、2021 年、97-98 頁

を変えた歴史の再認識がなされ、感染症と人間との関わりの重要性が見直されている。単純な比較はできないが、元患者の病と隔離の経験は、人類にとって普遍的な課題を提示していると考える。既に、医療、福祉などの分野では、同病また隔離については、人類の生存、社会における衛生また苦悩について重要な事柄として扱われ始めている。廣川和花は、その著作で、ハンセン病問題は、療養所に生きた人々だけの類い稀なる経験であるのではなく、「病の経験」として捉え直さなければならない」と述べている⁽⁶⁾。誤った隔離政策で長い隔離生活を強いられた入所者の病からの経験から、いのちの尊厳について私たちは何を継承し次の未来に教訓として伝えられるか考察できれば幸いである。

1 章 先行研究について

ハンセン病またハンセン病問題の研究は、1990 年以降、らい予防法廃止、国家賠償請求訴訟勝訴などを通して社会的関心が高まり、さまざまな分野での研究が蓄積されてきた。その流れは、まず「救癩の歴史」、そして「隔離政策」の批判的検証がなされ、加害者 VS 被害者の二項対立の枠組みで事実究明の調査や研究が先行されてきた。藤野豊は 1993 年⁽⁷⁾を通して隔離政策の問題を解明し、優性思想と国家主義が絡む差別の実態を明らかにした。その後、より入所者自身の生活史に立脚した、多角・世界的な視点での包括的な研究へと変化してきている。それらの流れとして、蘭由岐子や坂田勝彦、黒坂愛衣などが挙げられる。ハンセン病研究史の動向は、2011 年の廣川和花の著作に詳しい⁽⁹⁾。それらは、隔離政策に対してど

(6) 廣川和花「まとめ」『近代日本のハンセン病問題と地域社会』大阪大学出版会 2011 年、303 頁

(7) 藤野豊『日本ファシズムと医療』岩波書店、1993 年

(8) 代表的なものに蘭由岐子『「病の経験を聞き取る」——ハンセン病患者のライフヒストリー』皓星社、2004 年がある。

(9) 廣川和花「ハンセン病史研究の現在」『近代日本のハンセン病問題と地域社会』

うだったか（という指標）の観点で見落とされてきたものを受け止め直す、改めてハンセン病問題の総体を考察する働きと考えられる。

ハンセン病問題が抱える諸問題は複雑である。人権侵害、偏見差別の解消と再発防止、元患者の名誉回復とともに、入所者のみに視点が当たる場合、隔離政策の問題が道徳的な理解に対する倫理的批判にとどまり、国の責任に覆いがかかり不明確となりうる。そのため包括的研究の目的が、改めて問われていると言える。多面的議論の必要性と共に、国家が行った誤った政策に覆いがかからないよう正しい視点を明確にしていくことは留意せねばならないと考える。

森修一は、ハンセン病問題の構図理解、公衆衛生政策、医療、救済事業、隔離政策の視点が重要であると指摘⁽¹⁰⁾、時系列的変遷の理解として、特効薬の出現の前と後で分けて難治と可治の時代区分、日本と世界の対策の乖離⁽¹¹⁾、国家の公共政策、関係者（ステークホルダー）の関係性、医療、歴史学、社会学などをまたぐ重層的構造の俯瞰的理解の重要性を指摘している。安陪愛は、ハンセン病問題の複雑さについて、歴史の長さと移り変わり、医学的側面、また係わる人々の裾野の広さなどの相互連関を挙げ、具体例をもとに事実と価値の混同について言及している⁽¹²⁾。

翻って、日本におけるハンセン病とキリスト教の関わりに目を向けると、その歴史においては、多くのキリスト者医療従事者が、ハンセン病療養所医療に関わった。日本における患者への取り組みは、宗教者や特にキリスト者を中心とした活動で始まったといえる。それら、救済活動（批判

会』2011年、4-12頁

(10) 森修一「ハンセン病アーカイブズに求められるもの—「近現代ハンセン病資料アーカイブズ」の意義と課題」（『日本ハンセン病学会雑誌』86巻2号、2017年、125頁）

(11) 森修一「ハンセン病対策の歴史と現状——日本と世界」（『日本ハンセン病学会雑誌』、87巻2号、2018年、85頁）

(12) 安陪愛「ハンセン病問題におけるデータベース構築に関する研究——ハンセン病問題を次世代へ生かすための模索として」（『先端倫理研究』3号、2008年、79頁）

的、顕彰的)と療養所外からの支援活動の研究蓄積、入所者キリスト者による文芸や芸術など様々な記録が存在する。ここでは、おもに可治時代後の戦後の研究や書籍について触れる。

関わった人物や研究については森幹郎『足跡は消えても——ハンセン病史上のキリスト者たち』(ヨルダン社、1996年)があり、様々な関係者を取り上げている。より総論的なものには杉山博昭『キリスト教ハンセン病救済運動の軌跡』(大学教育出版、2009年)がある。人物、地域、教派など区分けがなされ、宣教活動、療養所内のキリスト者医療従事者、療養所内教会について全体が整理され、特徴あるキリスト者と地域の活動を詳細に取り上げている。

キリスト者犀川一夫は、医師として患者と接し、療養所の内実を知った人物としてその存在は重要である。犀川は、1944 - 60年の16年間国立療養所愛生園で勤務したのち、在宅治療を主張し台湾、沖縄で実践した医師であった。光田健輔のもとで勤務した経験をもちながら、隔離政策に反対した存在であり、⁽¹³⁾「らい予防法国賠訴訟」⁽¹⁴⁾の証言者の一人である。著作に『門は開かれて』(みすず書房、1988年)、『聖書のらい』(新教出版、1994年)、『ハンセン病医療ひとすじ』(岩波書店、1996年)等がある。それらを通して療養所内また入所者の実際を学ぶことができる。

次に、大学教員また療養所内教会牧師をつとめ、回復者と関わった荒井英子の著作に、『ハンセン病とキリスト教』(岩波書店、1996年)と『弱さを絆に——ハンセン病を学び、がんに生きて』(教文館、2011年)がある。前者で、荒井は、救済活動を担ったキリスト者の信仰構造に通底する問題を取り上げ、「魂の救いと人間の解放の両面を持つキリスト教がなぜ人権に無感覚になりえたか。「信仰と人権の二元論」こそが、キリスト教救済

(13) 吉崎一「光田健輔のハンセン病政策の変容に関する考察——林文雄・犀川一夫からの影響の比較分析」(『福山大学教育論叢』5号、2019年、127-148頁)

(14) 『証人調書③「らい予防法国賠訴訟」犀川一夫証言——遅くとも四十年前には「らい予防法」は廃止されるべきであった』ブックレット⑫、皓星社、2001年

史の根本問題であり、その根に「天皇制とキリスト教の問題があるとキリスト教事業を批判的に論考した。後者では、「ハンセン病の歴史と向き合う時、私たちは悲慘と苦難という側面のみで捉えてはならない。単なる『元患者』とか『被害者』というレッテルからではなく、一人の人間として真正面から向き合い、その肉声を聞き、今私たちは何を問われているか」と関わりの視点提示を記した。恵泉女学園大学の荒井英子ゼミや森田進ゼミによって行われた様々な人権教育活動からは以下の実がある。回復者桜井哲夫と当時学生であった金正美との交流からうまれた『しがまっこ溶けた一詩人桜井哲夫との歳月』（日本放送出版協会、2002年）からは、在日の立場からの視点、偽名への共感、込山志保子は詩人志樹逸馬の信仰について同大学誌に発表し、『新版志樹逸馬詩集』の略年表に貢献した⁽¹⁵⁾。

キリスト教界の課題としては、キリスト新聞が、2016年11-12月に4回にわけ「灯きえゆくとも『らい予防法』廃止から20年」と題して連載企画し、キリスト教会のハンセン病事業への関わりについて、隔離政策に対して抗う力になれなかった事実、療養所教会キリスト者の尊厳に満ちた存在の記憶をどう残すかなどについて課題を提示した。日本ハンセン病学会宗教部局の浜崎眞美神父は、「社会司牧通信」211号（2020年）で、「救らい」の克服なしには人権尊重の社会は実現しないと、間違いの否定ではなく、間違いを共有する社会へと、自らの加害性に目覚めることの重要性を提言している⁽¹⁷⁾。

他に、石居人也是『ハンセン病療養所を「開く」知としてのキリスト教』（2012-2014）の研究を行い、主に大島清松園の霊交会での調査研究によって、社会と療養所教会との関わりの意義を明らかにした。また、阿部安成による、同霊交会資料の目録作成・復刊などの歴史学からの研究レ

(15) 込山志保子「志樹逸馬の詩にみる信仰——こころのことばをきく」（『恵泉アカデミア』10号、2005年、224-203頁）

(16) 「寶山良三（志樹逸馬）年譜」『新編志樹逸馬詩集』若松英輔編、亜紀書房、2020年、275-300頁

(17) http://www.jesuitsocialcenter-tokyo.com/?page_id=8450 2021年11月27日確認

ポートがある。魂の救いか肉体の救いかの医療伝道の課題については、関西学院の創立者であるランバスによる医療宣教について論考翻訳がなされている⁽¹⁸⁾。

以上、キリスト教界においては、様々な積み重ねがなされているが、さらなる神学、倫理、人間論、宣教論にまたがる包括的修復論的な議論が必要であると思われる。昭和初期の国家に取り込まれていった「日本的キリスト教」の天皇制とキリスト教、「国家と教会」観、信教の自由や抵抗権の問題が、ハンセン病においては隔離政策「無らい県運動」などの協力に繋がり、個人の人生にまで影響を与えたことを知り、教会が、国家政策や当たり前のように見える公的福祉などに隠されている人権的不正や問題性を見極め批判できるためにも、神学的な考察を深めねばならないと考える。そして、回復者側と国家（療養所外差別を含む）に代表されてきた対立する二項間の真の修復の問題については、学び続ける事柄だと思われる。

2 章 ハンセン病療養所とは、どのような医療施設だったのか

現在、日本国内には、13の国立ハンセン病療養所が点在する。療養所は、1907（明治40）年制定の「癩予防ニ関スル件」により1909年、全国に5つの「道府県連合立らい療養所」が設置され、その歴史はほぼ1世紀を超えた（それらの運営は内務省主導、所長は内務省官僚、警察署長出身者で占められていた⁽¹⁹⁾）。その後、公立療養所として13箇所が設立され、後にすべてが国立療養所となり現在に至っている。1996年に「らい予防法」が廃止されても隔離体制は存続され、それまで90年間、約35,000人が隔離を受け、入所者の約7割は、50年以上に渡り療養所に留まりその地で生

(18) ウォルター・R・ランバス『医療宣教——二重の任務』関西学院大学出版会、2016年

(19) 藤野豊「隔離と患者の人権」『「いのち」の近代史——「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』かもがわ出版、2001年、65-71頁

涯を終えなければならなかった。⁽²⁰⁾2020 年 12 月現在、国内の療養所の入所者数は 1,029 名、平均年齢は 86.6 歳である。⁽²¹⁾ハンセン病患者（菌陽性）はおらず、後遺症による障害者と高齢者が暮らしている。その静寂をもつ外観からその本質は容易にとらえられない。しかし、一般の療養所とは違う特殊性、その歴史の一端に気づいていくことが大切であると考え。療養所は特効薬発見の前後で、違いがあるが、それぞれにおいて入所者の証言と関連史料の存在は重要である。社会復帰という退所者の歩みも行われたが、「今日のハンセン病政策研究からは、それは全患者収容、生涯隔離、社会防衛、患者の人権軽視という複数の言葉に形容され得る日本独自の絶対隔離政策であり、結果、多くの患者の悲劇が生じたのだ」⁽²²⁾と説明されるように、間違った優性思想に基づいた強制的収容や無らい県運動の国の政策により「病者の撲滅」を目的として国を挙げて作られた管理された収容施設であった。療養所の創設から現代までを対象とした研究には、川崎愛の『ハンセン病は人に何をもたらしたか』流通経済大学出版社、2020 年が詳しい。

療養所の多くは、設立当初、離島や人里離れた不便な場所にあった。施設は、時代の変化はあるが、寮生活で雑居を余儀なくされた生活で、軽症寮一般舎、不自由寮（舎）の区分、それぞれに独身と夫婦の住居があり、他に重症病棟があった。⁽²³⁾療養所内施設や居住環境については 境野健太郎⁽²⁴⁾の論文が詳しい。

(20) 坂田勝彦「ハンセン病療養所の施設整備に関する社会学的考察」（『社会学ジャーナル』2009 年、73 頁）

(21) 「ある群像」好善社 No.119、2021 年 6 月号、8 頁

(22) 森 修一「ハンセン病と医学Ⅱ——絶対隔離政策の進展と確立」（『日本ハンセン病学会雑誌』76 号、2017 年、29 頁）

(23) 全国ハンセン氏病患者協議会編『全患協運動史——ハンセン氏病患者のたたかひの記録』一光社 1977 年、69 頁

(24) 境野健太郎『ハンセン病療養所の施設構成と居住環境の変遷に関する研究』京都大学博士論文、2007 年

良い意味でも悪い意味でも協力せねばならない生活。自由に外出が出来ない、療養所でしか使用できない独自の通貨、女性が多い、男女比の問題、独身者の問題。収入格差などの様々な問題がその時代時代の中で存在した。島比呂志（1918-2003）は風刺小説『奇妙な国』でその姿を以下のように書き表した。一部を要約して記すことにする。

「実の家族との離別、実名を名乗れず、結婚しても子どもを産むことが許されない子供のいない社会、入所規定があっても退所規定がなく、火葬場、納骨堂があり死んでも故郷に埋葬されない。この国の法律が亡くなるまで90年間がかかった。この国では、滅亡こそが国家唯一の大理想だということだ。日本国は子孫を作らないために男性の精管を切り取ることを条件に衣食住と医療を補償すると記した。そこで、「奇妙な国」は、この地上から姿を消すことになる。しかし、人類はその歴史の中に、このような国が存在したことを忘れてはならない⁽²⁵⁾」。

多くの入所者は、その人生において絶望に出会い、自死を考え、試み、死と不条理な生に対峙、抗う経験をして、歩みを深めてきた。それらの中で、彼らが戦い得た、かけがえのない命の尊厳という普遍的な実在を、我々は受け取らなければならないと考える。

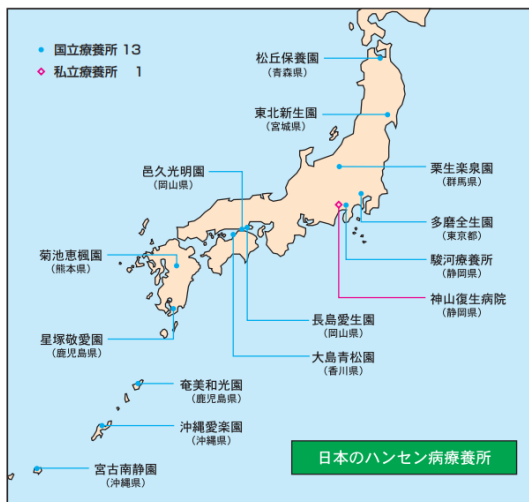
（１）療養所についての資料

まず、ハンセン病関係資料とは、行政公文書資料、患者関係資料、裁判訴訟記録、医療機関資料、医師関係資料、患者運動団体関係資料など多様な史資料がある。療養所についての史資料は、厚生労働省、各地域の出先機関、療養所および国立ハンセン病資料館、また各療養所内の交流会館、歴史館、神谷文庫（双見美智子による）などで、保存への意識は様々であるが保存や移管管理がなされている。このうち入所者側からの資料とし

(25) 島比呂志『奇妙な国』『ハンセン病文学』全集3小説、皓星社、2002年

国立療養所 入所者数 2020年12月末現在			
	男	女	計
松丘保養園	22	36	58
東北新生園	16	30	46
栗生楽泉園	26	27	53
多磨全生園	60	72	132
駿河療養所	24	22	46
長島愛生園	69	60	129
邑久光明園	29	43	72
大島青松園	24	21	45
菊池恵楓園	67	100	167
星塚敬愛園	38	54	92
奄美和光園	5	14	19
沖縄愛楽園	55	65	120
宮古南静園	25	25	50
20年12月計	460	569	1029
19年12月計	517	612	1129
前回比	-57	-43	-100

2021年2月 好善社調べ



「2020年の国立ハンセン病療養所入所者数 2020年12月末現在」⁽²⁶⁾

て、自治会発行の機関誌があり、入所者・職員の所感、文芸や、特集などバラエティに富んだ記述がなされている。何点かは、その発刊に教会が関わっている事例もある。多くは国立ハンセン病資料館にて保存、データベース化され、タイトルから検索が可能であり、回復者を知る上で貴重な資料である。また盲人会の機関紙、全患協ニュースなどがある。

各療養所の自治会沿革史、自治会日誌は重要な資料ではあるが、閉ざされた隔離療養所であり、それらの所在や概要は長く明らかにされず、利活用、研究が進まなかったと言われる。また、地域の自治体作成の資料集にも重要な原証言が収録、記述されている。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾

それら、記念誌、各療養所自治会機関誌、ハンセン病療養所記念誌など

(26) 『ある群像』(No.119、2021年6月号、7頁)『全患協ニュース』(2020年8月号)より引用

(27) <http://www.hansen-dis.jp/php/library/> 2021年9月8日最終閲覧

(28) 阿部安成「切片を集めて——ハンセン病をめぐる療養所の史料論へ」(『研究紀要』53号、2020年)

(29) 沖縄県ハンセン病証言集編集総務局編『沖縄県ハンセン病証言集』沖縄愛楽園自治会、宮古南静園入園者自治会、2006年、岡山県ハンセン病問題関連史料

は、現在、国立ハンセン病資料館ホームページのデータベースにより詳細⁽³⁰⁾検索が出来る。

3 章 療養所内教会とは、慰安教化の受け手だけだったのか

療養所は国立施設であるが、慰安教化、隔離政策を進めるため、宗教が奨励・活用された。また終生の隔離の場として火葬場や納骨堂が設けられたことから、各療養所には葬儀などのため必ず宗教地区が存在した。2005 年に出された「ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書 13 章」によると、2004 年 8 月時点で、入所者 3,436 人の 87.8%にあたる 3,019 人が⁽³¹⁾何らかの宗教あるいは所内の宗教団体と関わっている（療養所と宗教団体の関わり 413 頁）と記されている。仏教系は全体の 46.6%。キリスト教は 1081 人で全体の 31%、教会数 29、内訳はカトリックが 9.4%、聖公会 10.7%、プロテスタント 11.2%である。新宗教系は 8.4%。他に、神社は 10 療養所に建立され、8 療養所が現存している。

各療養所内のキリスト教会は全体では 29 の教会があり、各会堂が園内に設立されている。教派は、プロテスタント 17（聖公会含む）、カトリック 12。プロテスタントは、日本キリスト教団 (3)、日本聖公会 (6)、日本新生キリスト教会 (1)、キリストの教会 (1)、単立教会 (6) に大別される。⁽³²⁾また教会に残されている無教会の刊行物等よりその影響があったことが

調査委員会、ハンセン病問題関連史料調査専門員編『長島は語る——岡山県ハンセン病関係資料集』2007-2009 年

(30) <https://www.nhdm.jp/database/> 2021 年 11 月 27 日確認

(31) 「隔離政策に果たした各界の役割と責任（2）」宗教編 <https://www.mhlw.go.jp/toics/bukyoku/kenkou/hansen/kanren/4a.html> 2021 年 9 月 8 日最終閲覧

(32) 好善社 HP 頁 <https://kozensha.org/sanatorium/ima.html> 2021 年 9 月 8 日最終閲覧

わかっている⁽³³⁾。赤江達也はその著作で、無教会雑誌発刊と読者との相互の繋がり⁽³⁴⁾を「紙上の教会」という装置と位置づけその存在や影響力を論じた。各療養所教会での無教会の影響がどのようなものであったか今後の調査が待たれる。

表 療養所内の教会 好善社 HP 参照（筆者作成）

現在、各教会は、終焉といえる時期を迎えており、教会員が10名を切る教会も多い。ある教会の司祭は、葬儀をするために赴任した、というほど、葬儀は多い。亡くなる元患者が続く。地震などの災害で会堂が壊れる例もあり、2016年熊本地震で恵楓園教会は被災し使用できなくなり、会堂を移動した。今回行ったアンケート回答によると療養所の将来構想によるが、今後、国立施設の中にあるキリスト教会の会堂が残るかどうかは不明な点が多いと考えられる。

	療養所名	教会数	教会名
1	松丘保養園（旧：北部保養院）（1909）	3	松丘聖生会（単立）1920年発足、松丘聖ミカエル教会（聖公会）1912年発足、松丘カトリック愛徳会（1957年献堂）
2	東北新生園（1938）	3	新生園伝道所（日本新生基督教会）新生園開所と同時に開拓伝道、キリスト教信交会（単立）1962年発足、カトリック新生園教会 1950年発会
3	栗生楽泉園（1932）	2	聖慰主教会（日本聖公会）1939年献堂、草津カトリック教会 1956年発会
4	多磨全生園（旧：全生病院）（1909）	3	秋津教会（単立）1919年発足、日本聖公会聖フランシス・聖エリザベツ礼拝堂 1947年発足、カトリック愛徳会 1930年発足

- (33) 阿部安成・石居人也「無教会と愛汗：大島青松園キリスト教霊交会の2つの精神」（『滋賀大学経済学部 Working Paper』121号、2009年）、〈「鴨下重彦ほか編『矢内原忠雄』を読む〉聖書の生：国立療養所大島青松園キリスト教霊交会という交流の場所」（『滋賀大学経済学部 Working Paper Series』164号、2012年）、井藤道子ほか編『野菊——矢内原忠雄先生とらい療養所』野菊刊行会、1965年
- (34) 赤江達也『「紙上の教会」と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、2013年

5	駿河療養所 (1945)	2	神山教会（日本基督教団）1951 年発足、駿河カトリック教会
6	長島愛生園 (1930)	2	長島曙教会（単立）1931 年発足、ロザリオ教会（カトリック）
7	邑久光明園 (1938)（旧：外島 保養院 1909）	1	光明園家族教会（日本基督教団）（元外島家族教会）1912 年発足
8	大島青松園（旧： 大島療養所） (1909)	2	大島霊交会（単立）、大島カトリック聖心使徒会 1950 年聖心使徒会発足
9	菊池恵楓園（旧： 九州癩療養所） (1909)	2	菊池黎明教会（日本聖公会）1913 年黎明会発足、恵楓園カトリック暁星会 1953 年献堂大正初期会員 3 名で創立
10	星塚敬愛園 (1935)	2	恵生教会（単立）1935 年発足、星塚カトリック教会暁の星会 1949 年発足
11	奄美和光園 (1943)	2	名瀬教会 和光伝道所（日本基督教団）1948 年発足、ダミアノ教会（カトリック和光園教会）1953 年創立
12	沖縄愛楽園 (1938)	2	沖縄祈りの家教会（日本聖公会）1915 年発足、愛楽園聖フランシスコサベリオ教会（カトリック）1970 年献堂 1955 年二人の受洗者を機に教会名愛楽園聖心の使徒会の名称で出発し 1970 年に改称
13	宮古南静園 （県立宮古保養院） (1931)	3	南静園キリストの教会（聖公会）1962 年献堂、南静園聖ミカエル教会（聖公会）1959 年発足、イエズスの聖心教会（カトリック）1962 年献堂
	計	29	聖公会 6、カトリック 12、日本基督教団 3、単立 6 新生基督教会 1 キリストの教会 1

当初は、個室、共有など、それぞれの経緯で教会形成が始まり、その多くは、現在、コロナ禍の中で居住区の個室で礼拝をおこなっている。川崎愛は、その著書で「一人ひとりの当事者の存在の撲滅に抗って療養所で刻んだ歴史⁽³⁵⁾」と記したが、ハンセン病療養所内の教会は、神よりの命の尊厳を発見していくなかで、当事者の存在の撲滅に対抗してきたと言え、自己

(35) 川崎愛『前掲書』、2020 年、2 頁

の存在する価値を見出していった。

（１）療養所内教会の資料

その歴史の内実を知る教会の史資料は、各教会また教会員宅、各療養所内交流会館などに存在することがアンケートでわかった。週報を残している教会もあるが、全体として保存意識、保存状態が悪く、焼失した教会もある。まとまった書籍としては、各個教会記念誌（文末にリスト記載する）がある。全体がわかるものとしては、日本ハンセン病者福音宣教協会（MOL）から出版された『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』（好善社、1999年）があり、27教会の沿革、当時の各教会の活動報告がわかる。また療養所自治会等が発行した刊行物の宗教欄に記載がある。また、社会復帰をした回復者や療養所内教会と関わりをもった地域の各個教会史にその記録が残されている。松岡弘之は、雑誌『大阪の歴史』84号（2016年、107頁）にて、外島家族教会についての資料を日本基督教団大阪基督教会所蔵の資料から翻刻し紹介した。

支援団体好善社による刊行物は以下である。

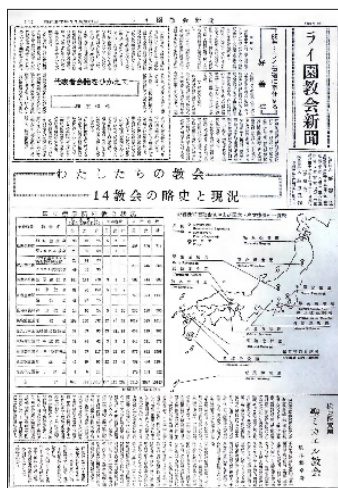
- ・『ライ園のキリスト者』1-19号（1961-1970年11月）年2回刊
- ・『ある群像』20-120号（1971-2021年12）年（継続後誌：現在刊行中）
- ・『ライ園教会新聞』1-3号（1962-1963年）次頁写真
- ・『らい園教会新聞』4-71号（1963-1982年）
- ・『療養所教会報』72-121号（1982-2006年）

（２）教会員数

好善社調べの統計によると、2020年5月現在、教会員数は338（男124、女214）人、園全体1091人との対比でみると園全体人口の31%である。最盛期の園の入所者人口は1万人を超え、教会員は約1500人が存在した。1950年代、約1万2千人だった入所者は現在、十分の一以下に減少、教会員も同じように減少している。以下の森修一⁽³⁶⁾らによる図1「入退者動向1909—2010年」によると1959年の11862人が一番多い。

それぞれの教会は、独自の教会形成があり、けっして一概にまとめるはならないものであるが、あえて共通点を記すと、以下のことが仮説として言えるのではないか。

病のなかで、外国籍や、後遺症で不自由な会員たち、視覚障害の方々など弱さを抱えた会員たちと共に助け合い、祈りあう群れとして教会形成を深めた。戦時下、敵性宗教との迫害をうけた教会もあった。制限のある療養所の中で必要なものは何か祈り求め、活動また支援し、自分たちを特殊化せず、神の前に謙遜に信仰生活を歩もうとした群れであった。



「ライ園教会新聞」

多くの教会は、戦後、療養所外部から様々な教職者を招き、運営など活

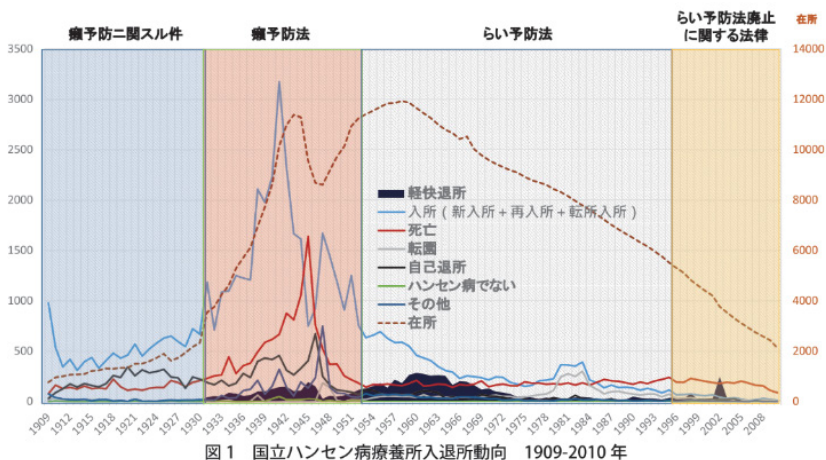


図1 国立ハンセン病療養所入退所動向 1909-2010年

(36) 森修一ほか「国立ハンセン病療養所における入退所動向に関する研究——1909年から2010年の入退所者数調査から」(『日本ハンセン病学会雑誌』88巻2号、2019年、67-69頁)

教会員の推移を好善社の資料からまとめると以下であった。

	入所者数			教会員数			年間増員		年間減員			
	男	女	計	男	女	計	受洗	入会	転園	退会	退園	死
2020年5月	500	591	1091	124	214	338	0	2	0	11	0	39
2000年12月	2507	1932	4439	620	647	1267	5	7	0	5	2	62
1990年12月	3845	2679	6524	928	838	1766	10	0	9	4	2	48
1980年12月	5075	3294	8369	1186	985	2171	10	8	7	10	1	32
1970年12月	5371	3663	9534	1341	1104	2445	27	30	0	14	16	37
1965年12月	5984	3645	9629	771	623	1394	11	0	27	15	22	16
1962年3月	6316	3827	10143	826	684	1510						

好善社「療養所教会報」⁽³⁷⁾「療養所新聞」より

動自体を信徒が担い、そのため超教派的雰囲気があった。場所的制約から成立時に、異なる教派が共同で一つの教会形成をして来た教会もある。療養所外の教会では、明治以降、社会派と福音派、また聖霊派と様々な教派がある中で、療養所内の各教会は、本質的な信仰において通じ合い、特に戦後、特効薬が出来、外部との交流の道が開かれていくと、外部の教会にも、彼らの信仰が良い影響を与えた。

不自由者の祈りの深さと聖書の言葉への情熱、あるものは、偽名から本名をかたることにより、自分の存在を確かにしたと証した。あるものは、軽症で社会復帰を考えたが、あえて、この病を得たことの意味を深め、はるかかなたの奄美和光の地で終生、伝道に励んだ。こうした彼らの姿は、各教会の記念誌からその事実が証しされている。社会から見棄てられてきた人々が、神により見出され、お互いを病友として助け合う交わりの中で、人間とは何者か、深い霊性を育んだと考える。それは、「イグナチオの霊操」における原理と原則のように、病いと健康、貧しさと富など、それらに不偏の心で臨み、病者も健常者もない神の前の世界に立つこと（ケノーシス的信仰）を修練していったと言えよう。長く、療養所教会に関わった

(37) * 注1) 療養所によっては上記以外にも少数の他教派信徒がいる。注2) 1965、1962年の数値は、新教のみ、また沖縄愛楽園、南静園の数は含まれていない。

牧師、河野進の以下の詩は、療養所内教会について理解を深めるものである。神谷美恵子の著作『生きがいについて』（1966 年）、『人間をみつめて』（1974 年）からもそれら信者のありようが記されている。⁽³⁸⁾

読む

目が見えなくなれば点字を読み
指先がまひすれば唇で読み
それも利かなくなれば舌で読み
舌が使えなくなったら
きっと新しい方法をさがすであろう
ハンセン病患者が聖書に取り組む執念と熱愛を見て
わたしはどのように読んでいるか

『河野進詩集「母」』聖恵授産所、1975 年

病まなければ

病まなければ 捧げえない祈りがある
病まなければ 信じ得ない奇蹟がある
病まなければ 聴き得ない御言がある
病まなければ 近づき得ない聖所がある
病まなければ 仰ぎ得ない聖顔がある
おお 病まなければ
私は人間でさえもあり得なかった

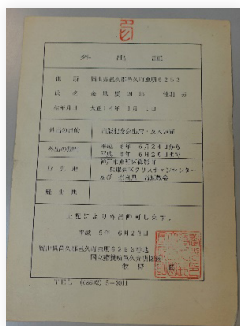
河野進詩集『祈りの塔』河野醫院、1949 年、74-75 頁

(38) 若松英輔「名無き賢者たちとの共同」『「生きがい」と出会うために——神谷美恵子のいのちの哲学』NHK 出版、2021 年、52-67 頁

(3) 療養所内教会会議について

(それぞれは療友教会、病友と表現しあう間柄であった)

各教会の交流は、隔離政策の中、文通あるいは録音テープを通して続け



外出届

られてきたが、顔と顔を合わせ語り祈りあうことなど直接会っての交流は特別な場合を除いて出来なかった。表示した写真は入出証明書である。外へ出かけるには外出届が必要であった。(写真は好善社 三吉理事長個人所蔵写真であり掲載の許諾を得たものである)

時代の変遷とともに外出制限も徐々に緩和されていたが、全国らい療養所内キリスト教会代表者会議が戦後三回開かれることで、各教会の交流は、一気に道が開かれた。会議では、礼拝、講演、各報告、懇談、レクリエーションを通しての教会の交わりと学び、療養所教会の将来が協議され、外部の教会より早い時期にエキュメニカルな雰囲気があったと言えよう。1回目を契機に教会間の交流が始まり、活発化していった特筆される会議であった。それらは、好善社が支援し、長島聖書学舎卒業生が運営を担った。それらが、好善社に残された『全国ライ療養所キリスト教会代表会議記録』と記されたファイルに記されている。1回と2回分は報告書(非売品)が刊行されている。

全国らい療養所キリスト教会代表者会議の概要は以下の通りである。

・第1回目：1962(昭和37)年11月24日—30日、7日間

主題：「療養所教会の交わり」

場所：邑久光明園光明園家族教会

参加：全国友園教会代表⁽³⁹⁾26名

(39)「ライ園のキリスト者」3号、1963年1月号、「ライ園教会新聞」2号、同年2月13日一面にこの一週間の模様が載せられている。1回と2回目については詳細な報告書が作成された。

- ・第2回目：1964（昭和39）年10月31日—11月6日、7日間

主題「療養所教会の交わりと使命」

場所：長島曙教会

参加：11教会、21名⁽⁴⁰⁾

- ・第3回目：1971（昭和46）年4月29日—5月5日、7日間

主題「交わりと伝道」

場所：鹿児島星塚敬愛園恵生会

参加：9園・10教会、13名

第3回には、地域教会として鹿島教会牧師吉井秀夫師が参加し、会議主催期間中には、鹿島キリスト教会と合同で講演会を開催した。

1972（昭和47）年6月12日—17日に6日間、多磨全生園秋津カトリック教会にて、第1回全国友園カトリック代表者会議が開催された。主題「信徒の交わり」のもと12療養所のカトリック教会代表が集まった。内容は、教会員の出席状況、布教、奉仕活動、献金の仕方などで、好善社が支援を行っている。その後、多磨全生園では、聖公会、カトリック、プロテスタント三教会による諸集会1992年—1993年、信仰一致祈祷会が開催されている。

「らい園教会新聞」32号によると、沖縄・宮古二園教会代表の本土訪問計画が、プロテスタント、聖公会、カトリックそれぞれの協力により行われたことが記されている。1971年4月、沖縄訪問、本土返還前のことである。様々な形でエキュメニカルな関りの広がりがなされていたことがわかる。

他にも、1968年、西日本寮園婦人の集いが恵生会主催、好善社後援で行われた。（西日本寮園盲信徒会）。

(40) 「ライ園のキリスト者」「ライ園教会新聞」8号、1965年1月31日一面

4章 好善社——外部からの療養所への働きかけについて

明治期、日本政府は、ハンセン病者に何ら救済を行わず放置している状態であった。そのような中、患者への医療的活動を始めたのは私設療養所であり、それらを支えた民間の援助団体が存在した。⁽⁴¹⁾多くの私設療養所は、始まりにおいて、隔離ではなく、患者を治療する目的で運営が行われた。この章では、明治期に設立された慰廃園とその設立団体である好善社について記す。

(1) 慰^い廃^{はい}園^{えん}

2021（令和3）年7月、目黒消防署近くの一角に碑が建立された。その碑には、以下のように記されている。

「私立病院「慰廃園」は国のハンセン病政策がまだ始まらない時期、偏見と差別のため、社会の中に生きることを許されなかったハンセン病患者に、キリスト教信仰に基づいて、安住と医療・療養の場所を提供した。太平洋戦争によって閉鎖を余儀なくされたが、その間に園した患者は4,159人であった。経営団体好善社創立1877（明治10）年 公益社団法人好善社」。



著者撮影

慰廃園はこの地で、1942（昭和17）年まで48年間存在した。入園していた患者が国立療養所多磨全生園に移管された後の1945（昭和20）年に建物等は空襲で焼失した。⁽⁴²⁾

(41) 「私立療養所」『復刻版——近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻6、不二出版、2005年

(42) 「百年前に開いたライ園となお活動する好善社の現用／藤原偉作」『ある群像』1994年、67号、2頁

この団体の設立は、女性宣教師と一人の女性ハンセン病患者との出会い（治療費負担決定）から始まった。その後、英国 MTL (Mission to Lepers) の援助をうけて開設されたものである。1907 年の法律第 11 号「癩予防ニ関スル件」施行の 13 年前のことである。東京府荏原郡目黒村に 1,500 坪の土地を購入し 1894（明治 27）年に慰廃園が設立された。大塚正心、かね夫妻を中心とした世話が行われた。大塚夫妻は東京公会（新栄教会）の会員であった。大塚正心（1846-1926）は、医師であり、病人の霊肉の救いのため、神学校に入り、伝道師資格を得た人物であった。御殿場神山で伝道する中でカトリックのハンセン病施設「復生病院」を知り、プロテスタント教会でも建設すべきと願っていたのである。慰廃園規則第二条において「本園は病院と異なり慈愛に富み給う全能なる神の聖旨を奉戴して憫然なる癩病患者を慰籍救養し且つ広く癩病患者に対して福音を宣伝するを以て目的とす」とその目的が明記されており、病院ではないこと、福音宣教を第一とする態度が明確にされている。その後、「国立伝染病研究所」の北里柴三郎からの依頼で、同研究所の患者を同園で受け入れ、北里が診療に加わり、1899（明治 32）年、東京府認定の「私立病院慰廃園」とな⁽⁴⁴⁾っていった。治療室や薬局など相応の医療的設備を備え、患者の住居、風呂場や洗濯場、物置など生活に必要なものすべてを備えた近代的療養施設であ⁽⁴⁵⁾った。入園患者一人ひとりの自主性を重んじ、家庭的雰囲気の中での療養と救済を保証する、後の療養所にみられない独自の伝統を形成してい⁽⁴⁶⁾た。当時の写真が好善社ホームページで閲覧できる。⁽⁴⁷⁾

その後、太平洋戦争が勃発して、米 MTL からの支援が途絶えると経営

(43) 「K. ヤングマンと好善社の人々」森幹郎『前掲書』1996 年、44-47 頁

(44) 「慰廃園、病院になる」『ある群像——好善社 100 年の歩み』日本基督教団出版局、1978 年、74-77 頁

(45) 青山静子「近代日本（1868-1941）におけるハンセン病対策と 3 人の来日女性宣教師のハンセン病患者救済活動」金城学院大学大学院博士論文、2014 年、7 頁

(46) 東京都公文書館国立ハンセン病資料館「人権の歴史とアーカイブズ——ハンセン病、隔離の歴史を超えて」（パンフレット）2016 年

(47) <https://kozensha.org/ihaien.html> 2021 年 11 月 27 日確認

難となり、運営者が高齢となったことも合わせ、1942（昭和17）年8月活動を解散し、患者56名を多磨全生園に送り、慰廃園は閉じることとなる。慰廃園では、設立当初から、伝道と慰安を重んじて、入院者は、隔離や排除の差別とは違う世界が成立していた。

（２）慰廃園関係の資料

- ・関正二「癩療養所慰廃園史」『郷土目黒』4号、1960年
- ・田丸太郎「ホスピス・慰廃園」『郷土目黒』37号、1993年
- ・平井雄一郎「私立癩療養所「慰廃園」考」歴史評論（656）2004年、44-56頁
- ・『社団法人好善社慰廃園畧沿革（献堂式創立満三十五年記念）』好善社、1929年
- ・棟居勇『「ハンセン病と目黒」——ハンセン病と慰廃園』好善社ブックレット22、2021年

（３）好善社について——その立ち位置

好善社は、療養所内教会を援助してきたキリスト教の団体である。1877（明治10）年から、キリスト教プロテスタントの精神による伝道と奉仕の事業活動を開始し、現在も活動を継続し、2021年で設立から144年の長い歴史を持つ。広報誌『ある群像』のタイトル通り、ハンセン病元患者に具体的な関わりを続けている小規模社団法人である。現在その事務所は慰廃園跡地にある。同組織の成立の過程と果たした役割についてその意義を考察する。

好善社の設立は、1877（明治10）年11月19日に、北米長老教会外国伝道局派遣女性宣教師のゲーテ・ヤングマン（Kate Youngman 1848-1910）による。⁽⁴⁸⁾ヤングマン師は、米国にて師範学校の聖書教師M・プライン（後の共

(48)『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、2003年、71-12頁、小檜山ルイ「ケイト・ヤングマン：築地とともにあった独身婦人宣教師」『築地居留地』vol.1、築地居留地研究会、2005年、40-47頁

立女子聖書学院となる偕成女学校の創始者の一人)に影響を受け、日本の女子教育を志し、1873(明治6)年に来日し、B6番女学校(現在の女子学院の前身校の一つ)など、次々と学校を設立した⁽⁴⁹⁾。そして、既に記したように、たった一人のらい患者との出会いから1894年、慰廃園を開設した。

青山静子によると、好善社の当初の主な活動は日曜学校と集会で、同窓生の相互扶助と後に続く女子学生への伝道活動であった。社員10名、入会資格は15歳以上のキリスト教女性信者で、民主的な組織作りや運営を経験させようとするものであった。小規模なボランティアサークル的な組織で始まった団体は、その設立時に、ハンセン病との関わりはなく、小さな集まりでの伝道と教育啓蒙活動が行われていた。それが、設立15年目に一人のハンセン病患者との出会いにより、ハンセン病援助に関わりを持っていくこととなる。

1995年の「ある群像」には設立当初のこの組織について本質的な事柄として「他のハンセン病事業がその創立者の名前で記録されるのと対照的、創立の当初から会議によってことを決し、グループとして事を運ぶ団体だった。関わりを持つ人たちの集まりであった」と記されている⁽⁵¹⁾。その伝統は、現在も受け継がれている。ハンセン病患者、とりわけ園内キリスト教会の信者とその証しにふれて、関わりを続けている群れである。使命感や奉仕を超えた、信仰に根差した「いのち」の分かち合い、人との出会いを団体の源泉として捉えていることが窺われる。

好善社は設立時より、伝道部、教育部、慈善部の3つの部門をもって活動を開始した⁽⁵²⁾。2021年現在は以下の3本柱として受け継がれている⁽⁵³⁾。①

(49)『日本キリスト教歴史人名事典』教文館、2020年、847頁、小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師——来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年、189-212頁

(50) 青山静子「前掲論文」、2014年、112頁

(51) 棟居 勇「群像としての好善社」『ある群像』75号、1995年5月、1頁

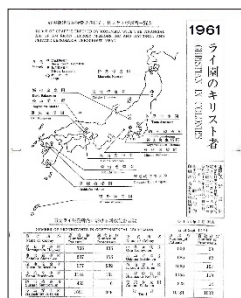
(52) 好善社『前述書』日本基督教団出版局、978年、66頁

(53) 「ある群像」119号、2021年、8頁

国内療養所の訪問、②タイ国での活動（海外への援助）、③一般社会への人権回復の広報宣伝活動。好善社は、療養所と療養所外の社会との間に入り、その連帯を促す働きをした。設立当初からその活動は、時代の要請に柔軟に対応しながら祈りを持って継続され、使命や目的といった理念より人との関わりの活動を運営の重要な柱にしてきたことが分かる。⁽⁵⁴⁾

（４）好善社が発行している機関誌及び資料

- ・「ライ園のキリスト者 Christian in colonies」1-19号（1961-1970年11月）年2回刊 継続後誌としてタイトルを「ある群像」に改称し刊行
 - ・「ある群像」20-120号（1971-2021.12）年 年2回刊行 現在刊行中
 - ・ライ園教会新聞 1-3号（1962-1963年）
 - ・らい園教会新聞 4-71号（1963-1982年）
 - ・療養所教会報 72-121号（1982） - （2006年）
- その他にシリーズ冊子として、『好善社ブックレット』1-22号、2006年 - 刊行継続中がある。



「ライ園のキリスト者」1号

5章 療養所内部からの働きかけ——抗い仕える、見出す人たち

（１）長島聖書学舎

長島聖書学舎とは、1961（昭和36）年4月から1971（昭和46）年3月まで10年存在した国立療養所長島愛生園内の曙教会の付属機関である。3年制の教育機関で校長は原田季夫であった。その存在は、療園の中に設けられた「望みの門」と表現された。これは旧約聖書ホセア書二章の「アコル（患難）の谷を望み門となす」からの言葉である。長島曙教会の一室の

(54) 松山龍彦「国際標準記録史料記述 (ISAD(G)) の小規模史料群への適用による編成記述の試み——好善社文書調査料整理」GCAS report = 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻研究年報 (4)、2015年、42-62頁において整理がされている。

図書室で始まり、翌 1962 年に同教会の隣に校舎が増改築された。全国の療養所から学生が集まり、1971 年まで 10 年 3 期、20 名の卒業生を輩出し閉舎した。運営また財政的支援を好善社が担った。

建学の目的は、療養所教会の療養者の中から指導者を育成することであり、「病者による病者の伝道」M of L (Mission of Lepers) であった（それは従来の「病者への伝道」M to L (Mission to Lepers) とは大きく違う画期的なことであった）。「らい療養所内の伝道は、外部の健康者によるものよりも、同じ病を負う者によってなされるほうがゆきとどいたものとなる、という考えに基づいて、深い福音的信仰と高い宗教的良識をそなえて、神と人⁽⁵⁵⁾とに仕えゆく人材を養成すること」であった。

校長原田によると「短期大学神学校であり」、学生大日向繁によると「聖書学校また私塾」、機関誌によると「いわば神学校の短大」などそれぞれの説明や認識に若干違いがある。授業科目を見ると神学、聖書学、一般教養学、ギリシャ語、ヘブル語、英語の科目があり、図書室が整備され、夏期伝道など行事等からみると他の神学校と変わることのない伝道者養成の教育機関と言えよう。以下、その教育内容を確認していくこととする。語学、神学と共に学生の信仰生活の指導も行われていたことが分かる。

一期生最初の授業（1961 年 4-7 月）⁽⁵⁶⁾の時間割は以下の通り。

				昼休	
月	祈祷会		(休養)		
火	祈り会	宣教学	英語		特別講義「文化と福音」
水		新約講義			教養学
木		旧約講義			聖書語句研究
金		宣教学	英語		旧約講義
土		福音書共同研究			賛美学
* 日曜日は礼拝並びに奉仕にあてる					

(55) 「原田季夫に賭ける」『前掲書』好善社編、日本基督教団出版局、1978 年、219 頁

(56) 「3 章わびしい誕生」『原田季夫と長島聖書学舎 - 書簡集』好善社、1990 年、97 頁

(57)
第三期生一学期時間割（1963 年）

	午 前	午 後
月	祈祷会	—————
火	モーセ五書（レビ記）	ギリシャ語
水	旧約講義（詩編）	イザヤ書（40 章以下）
木	新約概論	宣教学
金	教義学（ブルンナー著『仲保者』）	公開講義
土	新約講義（ヨハネ福音書）	—————

講義以外では、夏期伝道、修養会、慰問活動、毎日曜日は教会実習などが行われた。学生は、治療しながらの学びであるため、学びの間、治療時間は授業を抜けることなど、また病状による身体の制限など、不自由さの中での学びであった。それらの困難の中、原田校長は「得るために学ぶな、捨てるために学べ」と学生を励ました。機関誌にはその言葉が何度となく卒業生の思い出として登場する。「ライ園のキリスト者」4号、1963年は「特集：長島聖書学舎の一日」として4頁を割いてパトモス島の生活記録—長島聖書学舎の一日が写真と時計のイラストで記されている。

教員陣は、常任教師として原田季夫校長、小倉謙治（長島曙教会牧師）、播磨醇（光明園家族教会牧師、二代目校長）、佐治良三、松本治三郎（関西学院大学神学部）、松村克巳、城崎進、内藤留幸の教師陣であった。それ以外に集中講義として、松本治三郎、関根文之助、新見宏、馬場嘉市、高柳伊三郎、亀谷凌雲、米田豊、森山諭、渡辺信夫など、日本のキリスト教主義大学、神学校を代表する教授・教師が授業を担当し、学生を指導した。同志社大学、東京聖書学院、関西聖書神学校、日本農村神学校など、様々な教派の教員が集中講義などで協力した。

（2）原田季夫師について

初代校長となった原田季夫は、1908（明治41）年生れ、1967（昭和42）

(57) 「パトモス — 長島聖書学舎だより」長島聖書学舎、1963年、8頁

(58) 「ライ園のキリスト者」5号、1963年、5頁

年1月9日召天（享年58歳）。1958（昭和33）年3月、それまでの職である調布教会牧師、東京聖書学校教授を辞任して、長島愛生園の対岸虫明に住居を構えて同園伝道に献身し、曙教会聖書教師に就任。療養所教会への奉仕を開始した。50歳であった。若い時に、らいではないかと誤診されたことを奇縁として、いつかきっと病者のために働きたい願いをもち「病者による病者への伝道者」養成として長島聖書学舎で校長として勤めた⁽⁵⁹⁾。1966（昭和41）年春頃、腹部鈍痛黄疸の症状が現れ、岡山病院へ入院、病床での講義録音などで対応したが、病状は回復せず、翌年1967年1月腺癌のため召天した。らい伝道のため30年準備をし、7年間精魂を傾けつくした一生であった。曙教会にて聖書学舎合同葬儀が執り行われ内外から会葬者約500名が参加した⁽⁶⁰⁾。1987年、召天20周年記念会が長島曙教会で執り行われた。

長島聖書学舎の明確でユニークな建学の精神と10年間行われた教育の実践は、今後、神学教育史の中で新たに評価、位置づけがなされる必要があると思われる。日本キリスト教神学教育史に厚みと深さを与えるものである⁽⁶¹⁾と考える。

（3）原田季夫牧師および長島聖書学舎についての参考資料

- ・『原田季夫と長島聖書学舎——書簡集』藤原偉作・好善社著、1990年
- ・大日向繁『長島聖書学舎史』（キリスト教史談会パンフレット13）キリスト教史談会、1977年
- ・宇佐美伸編『原田季夫遺稿集』長島聖書学舎同窓会、1977年

(59) 5章新しい備え、3原田季夫に賭ける『前述書』日本基督教団出版、1978年、215-219頁

(60) 「ライ園のキリスト者」「原田季夫先生追悼号」12号、1967年6月、（『あけぼの』『原田牧師召天特集号』1967年2月171号、「らい園教会新聞」、1967年2月24日

(61) 設立までの背景は、「5章新しい備え」『前述書』1978年、220-234頁に詳しい。

- ・四竈揚ほか編『地の塩として —— キリストの証人たち 1 巻』、日本基督教団出版局、1975 年
- ・『あけぼの』171 号（原田牧師召天特集号）長島曙教会発行
- ・『ライ園のキリスト者』好善社、1-19 号、1962-1970 年
- ・『パトモス 長島聖書学舎だより』1-17 号、1962-1967 年
- ・長島聖書学舎同窓会だより『くびき』1 号-90 号、1967-1987 年
- ・『隔絶の里程 —— 長島愛生園入所者五十年史』長島愛生園入園者自治会編、243 頁

(4) 卒業生について

学んだ学生は全体で 20 名である。一期生 8 名、二期生 8 名、三期生 4 名である。その学びは、あるものは、視覚障害があり、病気のため筆記用具を両手で挟んで書くことに代表されるようにハンセン病の肉体的障害からの不自由さを抱えての学びであった。卒業後は、日本キリスト教団の補教師や正教師、療養所内教会の牧師、伝道師、また社会復帰して信徒として教会に仕える者、⁽⁶²⁾らい者による伝道を目的とした団体 MOL（日本ハンセン氏病福音宣教協会）に参画し一般社会への伝道活動を担う者など、それぞれが聖書学舎設立の目的を果たしていった。長い療養所の歴史をみると、それらは画期的な出来事といえる。一般社会より隔離された療養所内教会の歩みが、長島聖書学舎の活動を通して、療養所内外とのパイプを作り、園内の教会活動を推進また協力する体制の基礎を作っていた。それ以前には、同様の聖書を学ぶ機関として、1913 年、外島保養園内（大阪）にあった日本基督教会中会支援による福田荒太郎牧師によって設立された三年制のまなびや、⁽⁶³⁾1925 年、草津明星団の安倍千太郎⁽⁶⁴⁾（1882-1932）による日本ホーリネス教会東京聖書学院の分院として 2 年制の聖書学塾が

(62) 神子澤新八郎「社会生活十年を顧みて：1 - 7」『甲田の裾』松丘保養園慰安会、第 54 巻 第 3 号 - 55 巻 3 号、1983 年 - 1984 年

(63) 森幹郎『前述書』ヨルダン社、1996 年、127-128 頁

(64) 森幹郎『前述書』ヨルダン社、1996 年、169-173 頁

存在した。その働きは限られた範囲でのことであった。それら先例者たちの祈りが結実したものとも言える。

教会別では、神山教会 2 名、全生園泉教会 1 名、草津 聖慰め主教会 1 名、長島愛生園 曙教会 2 名、邑久光明園 家族教会 2 名、菊池黎明教会 1 名、星塚恵生会 3 名、奄美和光園 谷川教会 2 名計 14 名が療養所内教会で、牧師、伝道師、信徒として奉仕した。社会復帰を経験したものもいる。キリスト教の牧師など教職者として労した卒業生は以下である。日本基督教団正教師 5 名（大日方繁、原田政人、津島久雄、石原英一、井藤真祐）、伝道師 1 名（宇佐美伸）、日本聖公会執事 2 名（太田國男、武気敏雄）、日本基督教会牧師 1 名、キリスト教聖教団牧師 1 名（中村功）、単立 1 名（岡本広好）である。以下で、教職者についてのみ、既に書物や講演会などで名前を公表している人物について記す。

一期生：8 名 1961（昭和 36）年 4 月 15 日入学～1964（昭和 39）年 3 月 23 日卒業

曙教会出身 6 名、光明園（1 名）、鹿児島敬愛園恵生会 1 名、青森松丘聖生会から 1 名の計 8 名が入学した。未亡人が 1 名、視覚障害者が 1 名いた。教会では好善社から一人 500 円の奨学金を受けた。原田校長より 8 名のサムライとよばれた。平均 40 歳 光明園から自転車通学する学生もいた。

二期生：8 名 1964（昭和 39）年 4 月 10 日入学～1967（昭和 42）年 3 月 31 日卒業

曙教会 3 名、家族教会 2 名、星塚敬愛園 1 名、大島霊交会 1 名、草津聖慰主教会 1 名

年齢：20 代から 50 代、平均年齢 38 歳、自転車通学者 2 名がいた。集中講義が 7 月に行われ、新たな試みとして聖書学舎の学生と一般の神学生との共学が行われた。東京神学大、青山学院、関西学院、西南学院の 4 名の神学生と共に学び交わりが行われた。⁽⁶⁵⁾

(65) 新しい備え『前述書』好善社、日本基督教団出版局、1978 年、227 頁

三期生：4名 1968（昭和43）年6月3日年入学～1971（昭和46）年3月12日卒業 校長播磨醇師

星塚敬愛園2名、奄美和光園1名、菊池黎明教会1名、平均年齢は43歳、この時期の教員は、播磨、小倉兼治、佐治良三、内藤留幸、リカード、今村正夫先生、二期生が卒業して1年の間をおき再開、九州から3名、静岡から1名が入学し、卒業後、奄美、鹿児島、熊本の奉仕の地へそれぞれが遣わされた。原田季夫校長の遺言で三期生で閉舎した。

・井藤^{しんゆう}信祐（1926-2009年召天）享年83歳。石垣島出身。高等小学校で多磨全生園に入所、その後星塚敬愛園、沖縄愛楽園を経て敬愛園に再入所。所属は恵生教会。2つの園名をもった。長島聖書学舎へは10月になってから中途編入学した。夫婦で愛生園に移る。長島聖書学舎一期生として1964年卒業後、社会復帰して上京。日本聖書神学校に入学、当時教務主任をしていた太田⁽⁶⁶⁾俊雄より「（らい園出身）なんて何も気にすることでは無い、来て学びなさい」といわれ高卒認定を取った後、入学。電気会社で働きながら苦勞し23回生として1970（昭和45）年卒業（23回生）。社団法人JLM（日本キリスト教救癪⁽⁶⁷⁾協会）の事務局長を1968（昭和43）年から始め22年間勤め上げた。また1974年より日本基督教団松沢教会補教師として1980年まで奉仕し、その後1991年からは11年間、恵生教会で主任⁽⁶⁸⁾牧師として牧会を行った⁽⁶⁹⁾。

・大日向繁（1923-1991年召天）、青森県生まれ。農学校時代病告知宣告

(66) 敬和学園高校初代校長、「太田俊雄の宗教教育思想（1）」（『人文社会科学研究所年報』敬和学園大学 No.7、2009年）

(67) 『日本聖書神学校30年』1976年、302頁

(68) 『恵みに生かされて——国立療養所星塚園恵生教会創立五十年記念誌』1986年、256-264頁

(69) 井藤信祐について『石垣信祐の聖書物語』27巻、JLMの働きとして井藤信祐編『韓国救癪十年の歩み——小さな歩みをこつこつと』日本キリスト教救癪協会、1982年がある。

を受ける。17歳の時に北部保養園（現松ヶ丘保養園）に入園、1946年結婚。曙教会で1949年に受洗、長島聖書学舎一期生卒業後、駿河療養所神山教会へ転会。認定試験により日本キリスト教団正教師となり、沼津教会の伝道師となり、その後、神山教会牧師となり、教会は1990年に日本キリスト教団に加入した。病が発見され1991年に牧師を引退した。療養所教会の中心的存在であり、MOLの二代目理事長を1971年まで行った⁽⁷⁰⁾。

・岡本広好（生没年不明）愛媛出身。1942（昭和17）年19歳で長島愛生園に入所。昭和25年曙教会で受洗。視覚障害あり、長島聖書学舎一期生、秋津教会伝道師となる。

・原田政人^{まさんど}（1915-2008年召天）（曙教会）1938（昭和13）年病告知受ける。聖バルナバ慰安寮入所後閉鎖により長島愛生園1941（昭和16）年入所、同年曙教会にて受洗。長島聖書学舎一期生として卒業後、1964（昭和39）年4月曙教会伝道師就任、1981（昭和56）年5月日本基督教団正教師の按手を受け、昭和45年曙教会の牧師となる。同年6月曙教会の牧師に就任。「信頼のおけない頭の切れる大番頭よりも、愚かであってもこの男なら何でもまかせられる忠実な僕となれ」と原田季夫校長よりの励ましを大切に受け取った⁽⁷¹⁾。

・中村功（1921-没年不明）聖書学舎一期生1964（昭和39）年卒、基督聖協教団にて1976年按手をうけ牧師となる。基督聖協団名古屋教会を1973（昭和48）年から牧会し、後に単立教会として1983（昭和58）年頃まで、登美子夫人と夫婦で10年間牧師として奉仕をした。

(70) 大日向繁の著作、証には右のものがある。『いのち豊かに』大日向百合子、1992年、『わが主よわが神よ——説教集』大日向百合子、1996年、「使命への道」『現代のヨブたち：MOL証詞集』聖燈社、1972年、159-175頁

(71) めぐみの足跡『地の果ての証人たち MOL証詞集3』1976年、207-216頁

・宇佐美伸（生没年不明）長島愛生園入所。1954（昭和29）年受洗、長島聖書学舎二期生 1967（昭和42）年卒業、昭和43年、駿河療養所に移住、そのご駿河療養所内神山教会伝道師として仕える。

・太田國男（1931-2016年召天）享年84歳。10歳ごろから自覚症状が現れ、16歳で栗生楽泉園 1946（昭和21）年入所、1948年受洗、草津から長島愛生園へ転園し長島聖書学舎二期生、1964年入学し 1967年卒業、同年日本聖公会伝道師となり草津の聖慰主教会に戻り教会活動に専念し、1973年聖公会執事職牧師補に叙任、フランシス太田國男執事（聖職按手）として仕える。⁽⁷²⁾「さかえだより」を自主発行。MOL 理事をしていたが 1984年、聖慰主教会執事から熊本の菊池恵楓園に転園し菊池黎明教会での奉仕に専念した。通信教育でカウンセリング講座を受講し、電子メールカウンセラーとして 2001年に「いのちのeメール（心の相談）」を開設して十年間継続して奉仕した。趣味はインターネットで、ホームページ「ようこそ緑の牧場へ」⁽⁷³⁾を 2005年に開設、2011（平成23）年まで続けた。⁽⁷⁴⁾

・島本明（生年不明）沖縄愛楽園入所、一度社会復帰し学業アルバイトをしたが病が再発し、長島愛生園に入所し新良田高校に入学、その後長島聖書学舎二期入学し卒業後は、1969年日本聖書神学校入学、を 1973年度（第26回）に卒業し日本キリスト教会教師となり、地方で牧会し 2019年に引退した。

(72) 太田国男「わが杯にうくべきもの」『終末を告げる群れ——MOL証詞集2』1974年、136-145頁

(73) <http://ohtakunio.blog18.fc2.com/> 2021年11月確認

(74) 自著に『自分の十字架を背負って』玄遊舎、夫人について『終末の花——故タビタ太田清子に捧ぐ』1983年がある。2006年、『ある群像』79号 2001年6月号 1-3項に「仮想を実現するメディア——偏見と差別を超えた」と題してインターネットを用いて様々な宣教活動をしたことが記されている。同活動は、熊本日日新聞（2002年7月31日）にも「命ある場所」と題して記事に採り上げられた。

・津島久雄（1929- 没年不明）小学 6 年の時宣告受ける。小学校卒業時に光明園に入所。双葉寮（子供舎）で阿部礼治養父より育てられた。光明園家族教会で 17 歳の時に 1946（昭和 21）年受洗。長島聖書学舎二期生として 1967 年卒業。中途失明、回復、1949 年に既に光明園家族教会が日本基督教団に加入しており、その後、同師は、日本基督教団の検定試験を受け合格、1972 年より日本基督教団地区総会において伝道師として准允され、同年より光明園家族教会にて伝道師として仕える。1977 年には岡山教会で正教師按手礼受け牧師に任じられる。同年、光明園家族教会にて牧師任命式が執行され、その後同教会主任牧師として 2004（H16）年 4 月まで仕え、その後、隠退牧師となる。他に、日本 MOL の初代事務局長に就任（1969 年）し MOL の活動を支えた。⁽⁷⁵⁾

・佐々木良夫（1928-2017 年）享年 89 歳。長島聖書学舎第三期生、学生中に受洗。卒業後、学舎一期生の志樹治代と結婚した。1977 年（昭和 52）、奄美和光園にある谷川集会、名瀬教会（和光伝道所）の伝道師に就任、1980 年牧師に就任し。5 名前後の出席者で礼拝が守られていたが、2017 年に同師死去により、和光伝道所は閉鎖になった。⁽⁷⁶⁾

・武気敏雄（生年不明 -1985 年）黎明教会出身。聖書学舎第三期生 1968 年入学 -1971 年卒業して黎明教会に戻り、1974 年、聖職候補生の執事按手式、牧師補任命をうけ、1978 年に司祭就任した。

(75) 証詞や説教集に次がある。「この病いえずとも」『現代のヨブたち —— MOL 証詞集』聖燈社、1972 年、88-101 頁、『神の家族：光明園家族教会八十五年記念誌』1998 年、13 頁。津島久雄『説教集 —— 悩みの日にわたしを呼べ』新教出版社、2008 年、292 頁

(76) 同夫婦は山本俊一『日本らしい病史』東京大学出版会、1993 年、218 頁のあとがきに、国際ハンセン病会議に参加したことが記されている。

6章 その展開・交流

(1)療養所内の諸活動に邁進したキリスト者一地の塩として自治を助けた人々

療養所への園外宗教者の活動が一方通行の「慰安教化」活動と一まとめに説明されることがあるが、受け手の療養所教会キリスト者たちの中には、自らが様々な活動を実践し、一般社会に働きかけ、療養所の改革に協力する人々が多くいた。松岡弘之は「入所者に精神的慰安を与え政策を補完・推進するという、これまで強調されてきた宗教の期待される役割から逸脱するものであった」と指摘しており⁽⁷⁷⁾、このことはもっと一般的に評価され、適切な位置づけがなされてよいと考える。暗黒と混乱の初期療養所社会においてまたその後の自治会などを、療養所の改革、相互扶助の秩序を作り出した指導者には多くのキリスト者がいた。

まず、初期療養所での自治会活動に参画したキリスト者の一角に、阿部礼治が存在する。邑久光明園家族教会で長く長老をした阿部礼治である。光明園の患者総代も何期も務めた⁽⁷⁹⁾。松岡は、キリスト教信仰と「自治」について外島家族教会出身長老阿部礼治（1883〔明治16〕-1965〔昭和40〕年召天。1913〔大正12〕年外島保養所入院）の活動を記述し⁽⁸⁰⁾、阿部、桂文吉ら⁽⁸¹⁾外島からのキリスト者も園内刷新の担い手であったことを明らかにした。

(77) 第13章「ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(2)」『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』日弁連法務研究財団、2005年、438-440頁 <https://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/hansen/kanren/dl/4a23p.pdf> 2021年9月1日最終閲覧

(78) 松岡弘之「「相愛互助」自治の実践」『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房、2020年、43-48頁

(79) 「略歴」『おとうさん阿部礼治追悼記念集』日本基督教団光明園家族教会、昭和42年

(80) 松岡弘之『前述書』みすず書房、2020年、43-48頁

(81) 松岡弘之『前述書』みすず書房、2020年、87頁

また松岡は外島家族教会の資料について大阪の教会記念誌より翻刻を記載した。⁽⁸²⁾他に、霊交会創立者の一人であり、大島清松園で自治活動を担った三宅官之治（1877-1943 年召天、1910 年大島青松園療養所入所）については、阿部安成、⁽⁸³⁾森幹郎⁽⁸⁴⁾らがその歩みを記している。

1951（昭和 26）年 1 月、全国国立癪療養所患者協議会（全癪患協、後の全国ハンセン氏病患者協議会〔全患協〕）が組織され、特効薬プロミンの獲得を契機に全国療養所各自治会の連携が深められた。入所者の処遇改善を目指した自治会活動であり、病名の呼称変更、患者作業の廃止と患者看護制度の整備などの処遇改善などを求め、「らい予防法」反対運動を展開していった。⁽⁸⁵⁾その働きにも多くのキリスト者が関わった。その活動に松本馨（多磨全生園自治会代表）が存在する。18 年間自治会活動を担い、「小さき声」という伝道誌を発行した無教会キリスト者であった。⁽⁸⁶⁾当初よりらい予防法廃止を主張し、療養所の処遇改善、ハンセン病図書館（現在の国立ハンセン病資料館の前身にあたる）⁽⁸⁷⁾の設立に貢献した。その活動は、荒井英子『ハンセン病とキリスト教』第四章、田中裕『「将来構想」の歴史に学ぶ』皓星社ブックレット 16、2007 年にまとめられている。代表的著作に松本信『零点状況：ハンセン病患者闘いの物語』文芸社、2003 年がある。

(82) 松岡弘之「戦前期ハンセン病療養所における作業制度と患者自治 —— 一九三二年外島保養院作業改革について」（『大阪の歴史』72 号、59-81 頁）、史料紹介「日本基督教団大阪基督教会所蔵外島保養院家族教会関係資料」『大阪の歴史』大阪市史編纂所、84 号、2016 年、107-118 頁

(83) 『島で——ハンセン病療養所の百年』サンライズ出版、2015 年

(84) 森幹郎『前述書』ヨルダン社、1996 年、149-154 頁

(85) 松岡弘之『前述書』みすず書房、2020 年、315 頁

(86) 「小さき声」誌は、現在、NPO 法人今井館協友会の資料館で所蔵されている。
http://www.imaikankyoyukai.or.jp/public_html/riyou_siori.html 2021 年 9 月 9 日最終閲覧

(87) 田中裕「松本馨の「将来構想」キリスト教信仰と自治会活動」『「将来構想」の歴史に学ぶ』皓星社、2007 年、81 頁

他にも、神美知宏⁽⁸⁸⁾（多磨、2014）、石本俊市（大島）、曾我野一美⁽⁸⁹⁾（大島、1927-2012）、藤田三四郎（1926-2020、栗生）、天久佐信（沖縄）、藤崎陸安（多磨）、森元美代治（多磨、カトリック愛徳会）ら、その他にも多くのキリスト者が様々な自治会活動に関わった。国賠訴訟原告の中にもキリスト者がいた。田中民一（原告代表、星塚敬愛園恵生会）、玉城しげ（星塚敬愛園恵生会）、上野正子（星塚敬愛園恵生会）などである。それら回復者キリスト者の証の多くは、好善社による「好善社ブックレット」2006年～（刊行中）で記されている。

（２）キリスト者が関わった自治と社会活動について関連資料

- ・藤田三四郎「ハンセン病の歴史と過去・現在・未来について（特集 ハンセン病問題の今）」（『人権と部落問題』68(13)、2016年、36-39頁）
- ・森元美代治「ハンセン病回復者「社会に出て行く時代」を引っ張る」（『Aera』10（22）1997年、64-68頁）
- ・天久佐信『み手に伴われ』聖フランシスコ・ザベリオ教会、1992年
- ・志村久仁子「ハンセン病問題における当事者運動の中心的人物に関する研究 — 神美知宏・弐雄二の人生径路を糸口に」（『研究所年報』明治学院大学社会学部附属研究所、49号、2019年、89-102頁）
- ・神美知宏ほか「私たちが再び加害者の立場に立たないために——いま、療養所で起きていることを直視する（第9回交流集会記録）」（『ハンセン病市民学会年報』ハンセン病市民学会編、2013年、27-47頁）
- ・曾我野一美「インタビュールーム（576）全国ハンセン病療養所入所者協議会会長、療養所の実態踏まえた配置を」（『厚生福祉』5177号、2004年、10頁）
- ・上野正子『人間回復の瞬間^{とき}』南方新社、2009年

(88) 川崎愛『ハンセン病は人に何をもたらしたのか——ハンセン病療養所の創設から現代まで』流通経済大学出版会、2020年、147-159頁

(89) 川崎正明「闘いと祈りの人」『人生の並木道——ハンセン病療養所の手紙』工房ノア、2020年、246-255頁

(3) 日本ハンセン病者福音宣教協会 (MOL 1969 年 - 1999 年)

日本ハンセン病者福音宣教協会 (MOL Mission of Lepers) は、病療養所回復キリスト者による超教派の伝道団体である。長島聖書学舎卒業生を中心として運営・推進された。初代事務局長は、長島聖書学舎 1 回生の津島久雄であった。

1969 (昭和 44) 年 11 月 22 日、「ハンセン病者による福音宣教活動」の名のもとに、MOL の発会式が開催され設立された。この活動は、今まで、療養所外から受ける側の信徒が、外部に向けて宣教活動を行う事である。設立趣意書によると活動は、①療養所内教会の伝道活動の支援並びに一般伝道活動、②機関誌の発行及びハンセン病者による信仰文書の編集発行配布、③いづれかの場所を借りての集中伝道集会の開催、時に応じての巡回訪問に講師派遣、④信徒相互の交わりを深め、その他本会の目的達成に必要な事項の 4 点であった。初代会長は小倉兼治牧師で、全国療養所の同志百数十名を通常会員として、外部賛助会員百数十名でスタートした。(1976 年では会員 230 名、賛助会員 320 名賛助団体 550)⁽⁹⁰⁾ 20 周年記念集会が長島曙教会で行われ、30 年目の 1999 年 4 月 29 日に解散式礼拝が曙教会で実施されその幕を閉じた。最終号 324 号 (1999 年 5 月、30 頁) に 30 年の沿革史、設立趣意書、規約が掲載されている。



「MOL 広報」最終号

(4) MOL 関連資料

- ・機関紙『MOL 広報』1-324 号 (1969-1999 年) 発行 1100 部 (21 号より第三種郵便物許可)
- ・『MOL 証詞集』を日本ハンセン氏病者福音宣教協会 (MOL) として編集・刊行した。

(90) 大日向繁『長島聖書学舎史』1977 年、10 頁

『現代のヨブたち —— MOL 証詞集』 聖燈社、1972 年
『終末を告げる群れ —— MOL 証詞集 2』 新教出版社、1974 年
『地の果ての証人たち —— MOL 証詞集 3』 新教出版社、1976 年
『いのちの水は流れて —— MOL 説教・証詞集 4』 新教出版社、1979 年
『わたしの聖句』 聖山社、1985 年
『わたしの讃美歌 —— MOL 証詞 6』 日本 MOL 文書伝道部編、日本
MOL、1991 年
『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』 日本ハンセン病者福
音宣教協会、1999 年

「MOL 広報」によると、MOL の構想は、星塚敬愛園（鹿児島県）でイ
シガ・オサム氏⁽⁹¹⁾により唱導、芽生えて、星塚敬愛園のキリスト者の胸にあ
たためられて来たものである。「楓の蔭」MTL 機関紙（1949〔昭和 24〕年
12 月号）に「MOL のまぼろし」と題して MTL（ライ者のためのミッシ
ョン）の必然の結実としての MOL（ライ者によるミッション、ライ者の使節
団）ライが天刑ではなく天恵であり、その重荷を負わされたのは神の栄光
を表すためであるという使命のビジョンが掲載された（MOL10 号、再録）。
その後、1968 年に「キリスト者として」と題した印刷物が日本 MTL より
各教会の信者に郵送された。MOL の韓国救癩活動など幅広い活動が同誌
により捉えることができる。

（５）ワークキャンプ

戦後、療養所外の人々との交流事業が存在した。好善社では、全国学生
社会人ワークキャンプと題して、1963－1988 年まで国内各療養所で 60 回
ワークキャンプを開催し、延べ 1,000 人が参加した。⁽⁹²⁾回復者との人と人との
対話といった、生身の交流から生まれるものを大切にしたいプロジェクト

(91) イシガ オサムとは - コトバンク (kotobank.jp) 2021 年 11 月 27 日確認

(92) 好善社の歩み HP より <https://kozensha.org/history.html> 最終閲覧日 2021 年 8 月
24 日

であり、多くの若者がハンセン病療養所に足を踏み入れるチャンスを提供し、様々な影響を与えたと評価される。広報誌によると、この卒業生と療養所患者との交わり、関わりが長く続くことも多かったようである。

ワークキャンプはその他にキリスト教主義高等学校による、学生たちを引き連れての体験型人権教育、東京神学大学、関西学院大学、立教大学、⁽⁹³⁾その他神学校学生による夏期伝道受け入れなどが行われた。⁽⁹⁴⁾またフレンズ派団体 FIWC によるワークキャンプや社会復帰者への支援活動（むすびの家）⁽⁹⁵⁾などの活動がなされた。

好善社のワークキャンプについては、『ある群像』34号に掲載された精神科医の神谷美恵子の文章がその内容をよく表しているので次に引用する。

「患者たちは、憐れまれることも、自分たちの信仰や忍耐をむやみに持ち上げられることも、無関心あるいは好奇心の対象となることも嫌っている。故郷と身内を失った彼らは、何よりも同じ人間として一般社会の人と心をかよわすことを求めているのだ。誰かわかってくれないものだろうか。しきりにこう考えているときに、たまたま好善社のワークキャンプの人々と話し合う機会を与えられた。……このキャンパーたちには、「救らい」という気負いも「奉仕」という意識も感じられず、さりとして伝道や「患者の信仰から学ぶ」という目的もなさそうに見えた。ただ患者さんたちとともに肉体労働に汗を流し、心と心をかよわせ、同じ人間同士として生きる意味をたしかめた、というように見えた。肉体労働と共に、キャンパーは、患者自治会、園の職員、文芸団

(93) 宗教総部『関西学院事典』関西学院、2014年、148-149頁

(94) 岩坂二規「学生 YMCA ハンセン病療養所訪問プログラム 50年史の研究」(『関西学院大学人権研究』24号、2020年、1-21頁、聖和大及び関西学院大卒業生有志による記念誌『道——学生 YMCA「大島ワーク」の50年』2019年

(95) 「ある群像」別冊「全国学生社会人キリスト者ワーク・キャンプ 各年度感想文集、FIWC 報告書、木村聖哉ほか『「むすびの家」物語——ワークキャンプに賭けた青春群像』岩波書店、1997年

体、盲人会その他各種の集団と懇談会をもち、療養所社会全体を多角的にとらえようと努めているという」⁽⁹⁶⁾。

また、東京神学大学神学生で夏期伝道を体験した沢正彦の娘でシンガーソングライターの沢知恵は、現在、大島清松園霊交会と関わりを持ち、療養所園歌の研究、コンサート活動などの独自の活動を展開している。⁽⁹⁷⁾

（６）三島真光教会について

三島真光教会は、徳島県にあるプロテスタント教会である。療養所内教会と心通う交流を行った教会である。日本キリスト教団に属する。当時の牧師は、金田福一である。まだ「らい予防法」が廃止されていない時代に、積極的に入所キリスト者と交流を行い、療養所内教会の信徒を励ますだけでなく、自分たちもおおきな励ましを受けたことが様々な教会記念誌に記されている。

長島曙教会創立六十五周年記念誌によると、「戦後二十年、新薬は出たが、依然としてハンセン病に対する偏見は根強く、クリスチャンといえども自分たちの教会へ回復者信徒を受け入れるのを好まなかった時代、三島真光教会の申し出は大きな喜びとなった」⁽⁹⁸⁾と記されている。それまで療養所教会での外部との交わりは、主に教職者が来訪するだけで一般社会のキリスト教会員とは交流がなかった。

319 頁 30cmの大判である記念誌からその交流の概要を記すことにする。⁽⁹⁹⁾この冊子の特徴は、療養所教会との関わりについて同教会の百周年記念誌全体の内で多くの頁を割いていることである。療養所教会との合同聖会の記録 7 頁、合同聖会の恵み 69 頁、療養所教会との交わり 19 頁、療養所教

(96) 神谷美恵子「感想と願い」（『ある群像』34 号、1975 年 5 月号、1-2 頁）

(97) 沢知恵『日本の公立ハンセン病療養所の園歌——抑圧と解放のはざまで生まれた音楽』コモエスタ、2021 年

(98) 『約束の日を望みて——長島曙教会創立六十五周年記念誌』、1996 年、65 頁

(99) 『三島真光教会創立百周年記念誌——1901 年-2000 年』2004 年

会お礼の訪問記 72 頁 など、全体 319 頁の半分以上にあたる 167 頁を割いている。年表には 1965 (昭和 40) 年 12 月に合同聖会が、1967 年より始まり、回数は 20 回を重ねた。1989 年 10 月まで続いた。その経緯は、最初、1965 年 12 月に教会員滝山公香姉が同行し、初めて長島曙教会に訪問したことから、滝山姉と曙教会吉成稔兄との交歓から、2 教会の交流が始まり、そこから他の教会へと広がった。内容は、バスで療養所内教会の信徒を迎えに行き、一緒に礼拝・証会をし、教会と信徒の自宅に分散して宿泊し、不自由な人の世話をしながら、一緒に集会をもった。療養所教会の人たちを心からの歓迎し、共に交流を楽しみ心から付き合う集まりであった。祈りの課題を交換し文通などで励まし合った。

三島真光教会のように教会として継続的に、ハンセン病を理解し、信仰をもって受け入れた教会はその後、書籍などでは目にしないが、社会復帰をした回復者を受け入れ、共に教会生活を行った無名の教会がいくつか存在する。大阪東教会では、記念誌に役員をした回復者の名前を記した。現在、教会内に資料が残されている。

まとめにかえて

以上、療養所内教会と支援団体好善社などについて、その関わりに焦点をあて戦後の歩みを追ってきた。資料群は、3 つの大きなカテゴリーに分けられる。一つは、長い隔離政策の元にあった療養所に関わる資料群である。誤った優性思想が引き起こした全制的施設 Total institution⁽¹⁰⁰⁾ の記録である。二つ目は、その療養所内キリスト教会とその信者の資料群である。三つめは、外部団体との交流の資料群である。当事者との関係、違いをどう理解し、関われるか。共に歩む世界を目指すため重要な資料である。

療養者と療養所内教会に関わる史資料は、隔離政策の中で回復者キリスト者が、救癪の慰安教化を受ける対象だけではなく、病の中にあっても、

(100) E・ゴッフマン『アサイラム —— 施設被収容者の日常世界』誠信書房、1984 年

人間にとって重要で本質的な事柄を見出し、特に特効薬が発見された戦後は、信仰生活だけにとどまらず療養所の活動に積極的に関わり、療養所外の社会に働きかけてきた貴重な証しである。療養所内、また社会復帰した場で出来ることを行い、与えられえた「生命」を周りと分け合い、差別や偏見のない社会をめざし歩んだことを示す資料である。これらが語る事実は多くに人にとってハンセン病問題への理解の再考を促し、さらに生きる力を与えるものである。それら普遍的な信仰者の神への応答・不偏心を私たちは普遍的なものとして次の世代に伝える義務がある。

好善社資料群は、慰廃園から始まり、療養所内教会、長島聖書学舎、その後の支援や関わりなど、その沿革には聖書が示す「善きサマリア人」とは何かというテーマが通底しており、当事者の必要に耳を傾け、共に歩んでいくことを大切に活動を示すものである。療養所内部の教会と外部の人々の関わりを通して、社会における様々な壁の隔ての修復の在処、当事者との共生など、共にあゆむことの貴重なヒントやモデルが提示されていると考える。

以上、それぞれの資料は、読む者を今なお続くハンセン病回復者と家族に対する差別と偏見をよく理解し、この国における人権の問題の根を知り、共によりよい社会をつくるため関心や意識を持つことを促す。

キリスト教会においては、ハンセン病患者の隔離政策を結果的に助長し、患者の現実を人権の次元で捉えられなかった教会の人権意識の弱さ、霊肉二元論に陥りやすい傾向を認識して、終焉といわれるハンセン病療養所とその回復者を、捉え見つめることは重要であると思わされる。

ハンセン病は、プロミンという劇的な特効薬によって治る病となったが、人生における苦難にすぐ効く特効薬はないように思われる。療養所教会のキリスト者からわかることは、長くの療養所生活のなかで培われた祈りと聖書による日々の信仰生活で、隔離生活を生き抜き、獲得、形成されていった静かで深い霊性があるということを思わされる。その霊性は、暗闇の時代に、静かに人を強め慰める光を放つのである。

最後に、我々は、回復者キリスト者のもつ霊性が、豊かであるがゆえに、

それらに留まり、加害の歴史を意識せずにいることがあるかもしれない。人間の視野は限界があるものと知り、その都度、謙虚に立ち止まり複眼的に物事を見なければならぬことを心に留めたい。キリスト教会における、内面的信仰生活と社会的責任の二元論乖離の落とし穴に入らないようにしなければならない。そしてハンセン病問題からの問いに応じなければならない。

渡辺信夫に以下の文章がある。

「ライ園の教会が持っている宝が、私自身はライ園の中からすばらしい信仰の益を得ているし、それをやがて消えていくライ園教会の遺産として残してもらいたいと熱望しているが、遺産とすべきものを抽出し、確定する作業にはまだほとんど手がつけられていない。ライ体験はライ体験のままではなく、ライ者の信仰を語る事でもなく、もっと高められて、異なった体験の持ち主に追体験され、理解され、継承され、共有されるようにならなければならない⁽¹⁰¹⁾」。

本稿は、それら言葉に後押しされ、キリスト教の視点で何を受け取り継承すべきか考察した。

謝 辞

資料の閲覧やご提供いただいた、好善社三吉理事長をはじめ、調査にご協力頂きました多くの方々にこの場を借りて深くお礼申し上げ、改めて感謝をお伝えします。限られた文献を基にしているため、不確かな記述ではありますが、ご指摘ご指導いただけたら幸いです。司書・アーキビストからの実務的研究としてご寛容いただき、これらを通してハンセン病療養所内教会の資料の保存と継承のフレームワークが整えられれば幸甚です。

(101)『終末を告げる群れ——MOL 証詞集2』新教出版社、1974年、V-Vi 頁

* 本研究はJSPS 科研費 JP20H00687 の助成を受けた研究の一部を基にしています。

「わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ」。(旧約聖書：イザヤ書 66 章 2 節)

【教会記念誌など関連図書】

「自筆の A・D・ヘールの『経歴』」(『大阪女学院史』1 号、1984 年、133-135 頁)

大阪女学院創立 125 周年記念行事委員会『A・D・ヘール先生と外島家族教会』大阪女学院、2008 年、16 頁

『故ヘール先生の片影』外島家族教会編、1926 年

青木恵哉『えらばれた島』新教出版社、1972 年、298、8 頁、各版あり

『湯之澤聖バルナバ教会史』徳満唯吉著・湯之沢聖バルナバ教会編、聖慰主教会、1982 年、366 頁

『日本基督教団神山教会史 —— ハンセン病療養所教会 50 年の歩み』日本基督教団神山教会、1997 年、325 頁

『神の家族 —— 光明園家族教会八十五年記念誌』1998 年、514 頁

『続神の家族 —— 光明園家族教会の 100 年』日本基督教団光明園家族教会、2013 年、140 頁

「魂の架け橋」出版特別班『魂の架け橋 —— ロザリオ教会(長島愛生園) 60 年の歩み』岡山カトリック教会、2009 年、250 頁、図版 19 頁

徳田祐弼『愛楽園祈の家教会沿革史』沖縄教区祈の家教会、1976 年

『祈りの家教会 —— 献堂 30 周年記念誌』日本聖公会沖縄教区、1984 年、225 頁

百年史編纂委員会『神山復生病院の 100 年』春秋社、1989 年、247 頁

『いのちの遺産 —— 神山復生病院創立 110 年』神山復生病院、1999 年、231 頁

『神山復生病院 120 年の歩み』神山復生病院復生記念館、[2009 年]、146

頁

『約束の日を望みて —— 長島曙教会創立六十五周年記念誌』1996 年、
343 頁、年表あり

阿部礼治『家族教会小伝』

『復刻版霊交誌 —— 大島キリスト教霊交会所蔵』大島キリスト教霊交
会 [編]、2010 年、6 冊 + 別冊 DVD (『霊交会創立五十周年記念誌』
1964 年、デジタルリプリント版を含む)

『れいめい —— 暁を待つ人びと「詩編第一三〇篇第六節」』菊池黎明教
会記念誌編纂委員会編纂、日本聖公会菊池黎明教会、1992 年、318
頁、図版 [25] 頁

『れいめい II 1992-2012 —— 黎明会発足 100 周年献堂 60 周年記念誌』
菊池黎明教会、2012 年、377 頁

『黎明教会発足 100 周年献堂 60 周年記念誌報告集』菊池黎明教会

『待労院』社会福祉法人聖母会 (1989 年創立 100 周年記念誌)、35 頁

『私立ハンセン病療養所待労院の歩み —— 創立から閉院までの 115 年』
(国立ハンセン病資料館 2015 年秋季企画展展示図録、2015 年、39 頁
マリアの宣教者フランシスコ修道会・熊本修道院編『共に寄り添った
120 年の歩み』マリアの宣教者フランシスコ修道会・熊本修道院、
2018 年

『いずみ —— 多磨全生園カトリック愛徳会六十周年記念誌』カトリッ
ク愛徳会、1991 年